

特許協力条約

発信人 日本国特許庁（国際調査機関）

出願人代理人
西川 恵清

あて名

〒 530-0001
大阪府大阪市北区梅田1丁目12番17号
梅田第一生命ビル5階 北斗特許事務所

様

PCT
国際調査機関の見解書
(法施行規則第40条の2)
〔PCT規則43の2.1〕発送日
(日.月.年) 01.03.2005出願人又は代理人
の書類記号 MEW1916J 今後の手続きについては、下記2を参照すること。

国際出願番号 PCT/JP2004/015914 国際出願日 (日.月.年) 27.10.2004 優先日 (日.月.年) 27.10.2003

国際特許分類 (IPC) Int. C17 H01K1/04, H05B3/10, G01N21/01

出願人 (氏名又は名称)
松下電工株式会社

1. この見解書は次の内容を含む。

第I欄 見解の基礎
 第II欄 優先権
 第III欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解の不作成
 第IV欄 発明の単一性の欠如
 第V欄 PCT規則43の2.1(a)(i)に規定する新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解、それを裏付けるための文献及び説明
 第VI欄 ある種の引用文献
 第VII欄 国際出願の不備
 第VIII欄 国際出願に対する意見

2. 今後の手続き

国際予備審査の請求がされた場合は、出願人がこの国際調査機関とは異なる国際予備審査機関を選択し、かつ、その国際予備審査機関がPCT規則66.1の2(b)の規定に基づいて国際調査機関の見解書を国際予備審査機関の見解書とみなさない旨を国際事務局に通知していた場合を除いて、この見解書は国際予備審査機関の最初の見解書とみなされる。

この見解書が上記のように国際予備審査機関の見解書とみなされる場合、様式PCT/ISA/220を送付した日から3月又は優先日から22月のうちいずれか遅く満了する期限が経過するまでに、出願人は国際予備審査機関に、適当な場合は補正書とともに、答弁書を提出することができる。

さらなる選択肢は、様式PCT/ISA/220を参照すること。

3. さらなる詳細は、様式PCT/ISA/220の備考を参照すること。

見解書を作成した日

25.01.2005

名称及びあて先 日本国特許庁 (ISA/JP) 郵便番号 100-8915 東京都千代田区霞が関三丁目4番3号	特許庁審査官 (権限のある職員) 河原 英雄	2G	8506
電話番号 03-3581-1101 内線 3225			

第I欄 見解の基礎

1. この見解書は、下記に示す場合を除くほか、国際出願の言語を基礎として作成された。

この見解書は、_____語による翻訳文を基礎として作成した。
それは国際調査のために提出されたPCT規則12.3及び23.1(b)にいう翻訳文の言語である。

2. この国際出願で開示されかつ請求の範囲に係る発明に不可欠なスクレオチド又はアミノ酸配列に関して、
以下に基づき見解書を作成した。

a. タイプ 配列表

配列表に関連するテーブル

b. フォーマット 書面

コンピュータ読み取り可能な形式

c. 提出時期 出願時の国際出願に含まれる

この国際出願と共にコンピュータ読み取り可能な形式により提出された

出願後に、調査のために、この国際調査機関に提出された

3. さらに、配列表又は配列表に関連するテーブルを提出した場合に、出願後に提出した配列若しくは追加して提出した配列が出願時に提出した配列と同一である旨、又は、出願時の開示を超える事項を含まない旨の陳述書の提出があった。

4. 拡足意見：

第V欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についてのPCT規則43の2.1(a)(i)に定める見解、それを裏付ける文献及び説明

1. 見解

新規性 (N) 請求の範囲 2-13 有
請求の範囲 1 無

進歩性 (I S) 請求の範囲 2-4, 6-13 有
請求の範囲 1, 5 無

産業上の利用可能性 (I A) 請求の範囲 1-13 有
請求の範囲 無

2. 文献及び説明

文献1: JP 11-67740 A (信越化学工業株式会社) 1999. 03. 09, 段落【0023】、【0024】、図3

請求の範囲1に係る発明は、国際調査報告で引用された文献1に記載されているので、新規性、進歩性を有しない。文献1には、シリコン製基材の片面にSiO₂酸化膜を形成し、前記SiO₂酸化膜の上に発熱層を形成してなる加熱体が記載されている。文献1に記載された発明における「SiO₂酸化膜」は、請求の範囲1に係る発明における「多孔質断熱層」相当する。また、文献1に記載された発明において、発熱層が通電により赤外線を放射することは明かである。

請求の範囲5に係る発明は、文献1により進歩性を有しない。炭素からなる発熱材料は周知であり、文献1に記載された発明において、発熱層の材料として炭素からなるものを用いることに格別の困難性はない。

請求の範囲2-4, 6-13に係る発明は、国際調査報告で引用されたいずれの文献にも記載されておらず、当業者にとって自明なものでもない。